

読みもの

□新春特集□

社会貢献活動と自己有用感

— 自発的な思いを育む —

国立教育政策研究所生徒指導研究センター
総括研究官

滝 充

今どきの若者

今どきの若い人を見て、「あいさつもしない」「年寄りや弱者への思いやりが無い」「周りのことを考えない」などと感じる方は少なくないことでしょう。私自身も、傍若無人に歩行者のかたわらをすり抜ける若者の自転車にヒヤツとしたり、電車等で大きく座席を占有する姿にあきれたりしています。

私の仕事は、子どもが安心して健全に育つよう、調査や研究を通して学校関係者のお手伝いをする事です。そんな関係で、学校ではどんな指導を行っているかを先生方に尋ねると、多いのはあいさつ運動や昔ながらの訓話、目新しいところではスキ

ル訓練などといった答えが返ってきます。

ただ、そうした指導が実際に成果を上げているかについては、正直、疑問を感じています。指導直後はともかく、その後も継続してあいさつができたり、相手や周りを思いやったりしているかは怪しいうえに、継続していた場合でも心から納得している可能性は低いであろうと推察するからです。

そもそも、規範意識であるとか、思いやりや気遣いなどといった種類の社会性は、形だけ教えてもあまり役には立ちません。きまりを進んで守ろうとする、相手のことに気づく、何かしてあげたい気持ち湧きおこるなど、特に傍点部分の心の動きが

重要だからです。つまり、それらは「自発的な思い」である点に意味があり、強制されたり、他人に言われたりして、というのでは、あまり意味がないのです。

とはいえ、そうした思いをうまく育めるかどうかは、学校でも家庭でも大きな課題と言えます。単純に「教える、訓練する」ことを繰り返せば「心が育つ、意欲が生まれる」という結果につながる、とは限らないからです。先に紹介した学校の取組に疑問を呈したのも、そんな理由からなのです。

社会性の未熟・未発達

私は、学校で問題を起こす子どもはもちろん、問題がなさそうに見える子どもも含め、その親くらいまでの若い人に共通する課題を「社会性の未熟・未発達」として捉えています。そして、これをもたらす原因や背景を、他者や社会と関わった体験が乏しいまま大人へと成長していくという、今の家庭や社会の在り方に求めています。

そんな状態で育った人間が、他人に対する関心が乏しく、自分の欲求や要求の実現だけが関心事にな

る、というのにも無理はありません。そもそも彼らには、他人のことなど目に入らないのです。もし入るとすれば、自分の欲求実現の妨げとなる障害物としてくらいでしょう。そう考えれば、冒頭で触れた若者の姿も、容易に理解できるはずです。

そんな彼らの行為が、法に触れた、法に反した、としましょう。そんなつもりではなかったにせよ、彼らの行ったことは罪に問われます。しかし、彼らにしてみれば「自分のしたいことが、たまたま違法とされていただけのこと」ですから、必ずしも更生の気持ちが生ええるとは限りません。

これは、昔ながらの犯罪者とはかなり違った特徴と言えます。犯罪と知りつつ、やむにやまれず法を犯した場合、それなりの動機が存在するのが普通です。もちろん、その多くは自分本位な動機ですが、刑罰と引き替えにしても構わないくらいの理由があって犯罪をした場合には、冷静になって動機の身勝手さに気づけば罪の意識も正常に働きます。

ところが、社会性が未熟・未発達な場合、さしたる動機もなく一線を越えたりします。違法という知

識があっても、あまり歯止めにはなりません。また、被害者に対して、そんな所にいたから悪い、だまされるほうが悪いなどとか考えられません。罪を自覚すること自体が非常に困難なのです。

要するに、彼らの精神は外見の印象よりもずっと「幼い」のです。ただ、こうした幼さは地域や家庭の教育力が乏しくなり、社会性が育つ場や機会が提供されなくなった結果でもあります。その意味では、彼らも被害者と言えなくはありません。

鍵となる「自己有用感」

そこで、そうした若者にならないよう、学校関係者に提案して成果を上げてきた取組が、校内の異学年交流や地域の職場体験の機会に「お世話をする」「他人の役に立つ」という実体験を提供する「日本のピア・サポート・プログラム」です。

これは、一種の奉仕体験（ボランティア）活動ですが、奉仕させること自体が目的なのではありません。そうした体験を通して児童生徒が「自己有用感」を獲得できることが、活動の目的なのです。

自己有用感という言葉を初めて聞くという方も、多いことでしょう。自己肯定感とか自己存在感と呼ばれるものとも重なりますが、大きな違いは、相手に認めてもらった、相手に受け入れられた、相手の役に立てたなどの、他者との関わりを前提にして生まれる自分に対する肯定的な感情、という点です。

有名な社会心理学者の理論を借りて説明すると、人間という動物の行動を動機づけるもの（自発的な欲求）のうち、最初に現れるのは食欲に代表される生命維持のための「生理的欲求」です。そして、それがある程度満たされると、次に恐怖・不安からの自由・安全・安定を求める「安全の欲求」が現れてきます。これら二つを満たすべく罪を繰り返す者がいることは、みなさんよく御存じのことでしょう。それらが満たされてくると生まれてくるのが、愛情に満ちた関係や自分の居場所を求める「所属と愛の欲求」です。これが十分であれば犯罪への抑止力になります。その有り難さに気づかなかつたり、不十分なもの、時に歪んだものであつたりすると、犯罪を犯すことにもつながります。

しかし、人間が社会的な存在たりうるのは、この次の「承認の欲求」、他者からの尊敬や承認を欲するがゆえです。周りの愛情に気づき、それに感謝する中で、自分も誰かの役に立ちたいとの思いが芽生えてくる。そして、ささやかな行いであっても、それが実現できたとき、相手が喜んでくれたときに得られる大きな喜び。これが自己有用感です。

今の若者でも、そうした自己有用感を獲得できれば、遵法精神や規範意識、思いやりや気配りといった、自発的な思いを育んでいけるのです。

貢献する体験の大切さ

現在、保護観察所では社会参加活動が行われており、将来、新たに社会貢献活動を導入していく予定だと聞いています。新たな活動では、ただ参加させて終わるのではなく、そうした社会に貢献する場や機会を通して、彼らが確実に自己有用感を獲得できるようにする工夫が大切でしょう。

たとえば、保護観察対象者を環境美化活動に参加

させるとします。「言われたから」「仕方なしに」という気持ちで参加し、とりあえず作業を終えただけでは、単なる「罰ゲーム」としてしか受け止められない可能性もあります。そうなるのは、せっかくの貴重な場や機会がもつたいないと思います。

一緒に参加している保護司やボランティアの方などから何気なく声をかけてもらう中で、周りの存在に気づいたり、自分の行っている地味な清掃作業の価値を認めてもらえてうれしく感じたりする体験。そのささいな積み重ねが、彼らの乏しい社会性の発達を促します。周りの参加者はそのことをしっかりと理解し、適切な言動で彼らの自己有用感の獲得を支援する役割を果たす必要があるのです。

自己有用感が獲得できていれば、わずかなかわたりや細かいつながりであっても、人に一線を越えさせない抑止力になります。社会貢献活動は、やり方の工夫によって、改善更生や再犯防止に大きな役割を果たす可能性を秘めた活動として、大いに期待ができるのです。